

舞

たうん

Vol. **158**
2025.7

特集

多様な人材との共生による地域づくり
Well-beingな社会を目指してPart2



はじめに

本号の企画を考える中で、「地域づくりに対して私が関心を持つ内容は何か」と考え、真っ先に思い浮かんだのが、SNSなどで顕在化する属性の違いによる誤解の連鎖でした。都市と地方、外から来た人と中にいる人の価値観の違いなど、立場や背景が異なる人同士のすれ違いや摩擦が可視化されやすくなった今、より顕著に表面化しているのではないかと感じています。そしてそれは、SNS、ひいてはインターネットという広い世界の中だけではなく、移住者と受け入れる側などの地域づくりでも同様の課題が生じています。

多様な立場や経験、価値観を持った人々が地域で共に暮らすことで、これまではなかった新しい視点や活力がもたらされる一方で、背景の違いから生まれる「当たり前」のズレや、意識のギャップによるトラブルが生じることもあると思います。こうした違いに直面した時にこそ、お互いの意識やスタンスの違いを丁寧にすり合わせ、自らの考え方や行動を少し変化させる柔軟さや、多様な幸福感を共有しようとする“寛容性”を持ち、共に生きる姿を模索し続けることが幸せという指標を持つ、これからの地域づくりにおいても意識することが求められているのではないかと思います。

現在、多くの自治体が、深刻化する人口減少に対して、移住促進や子育て支援といった様々な施策を展開し、わがまちへ人を呼び込むことで地方創生の実現しようとしています。しかし、地域が本当にめざすべきは、単なる「人口の数合わせ」ではなく、その地域に暮らす人や訪れる人たち、一人ひとりの幸福度(Well-being)の向上であるはずで。そのための行政の施策や地域団体・住民の自主的活動によって地域の魅力を獲得し、その魅力を高めることができれば、自ずと地元で生まれ育った若者や、いなか暮らしに憧れる移住希望者、地方の歴史・文化に興味を持ち関わりを求める人々に「選ばれる地域」となり、人の流れにも好循環が生まれていくことでしょう。

さて前号では、「外国人との共生」を切り口に、Well-beingな地域づくりのあり方を紹介しました。今回はその視点を広げ、「外部人材や関係人口などの共生」をテーマに、県内外の好事例を交えながら、多様な人々がどのように交わり、地域で共に暮らしていけばよいのかを探ります。読者の皆さまにとって、本号が、立場の違いを超えて地域の可能性を広げていくヒントとなれば幸いです

(アドバイザー 川村 明香)



■はじめに.....	1
川村 明香/アドバイザー	
●アングル.....	2
多様な人とつながり、多様な幸福を育む地域へ ～外部人材との共生がもたらすウェルビーイングな地域づくり～ 鍋島 悠弥/総務省 地域おこし協力隊アドバイザー	
●特集/多様な人材との共生による地域づくり ～Well-beingな社会を目指してPart2～	
①「心のパンツが脱げるまち」.....	5
西村 吉仁/西予市狩江地域づくり活動センター 係長	
②地域を動かす「つなぐ力」.....	8
～共創の鍵を握る地域コーディネーターの役割とは～ 光野 達也/NPO法人Eyes	
③人が集い、挑戦が芽吹くまちへ.....	10
西野 広恵/一般社団法人ゆりラボ 理事	
④「祭り×関係人口」で地域コミュニティをアップデートする.....	12
安形 真/公益財団法人えひめ西条つながり基金 事務局長	
⑤宮島で持続可能な観光地域をめざす.....	14
「千年先も、いつくしむ。」プロジェクトの推進 佐々木 正臣/広島県廿日市市宮島企画調整課	
●地域とつながり地域に学ぶ～愛媛大学社会共創学部だより～.....	16
ものづくりで課題を解決 西川 祥平/愛媛大学社会共創学部産業イノベーション学科	
●地域おこし協力隊 リレーレポート.....	18
『地元で生きることが、自分にとってのWell-being』 大廣 将也/四国中央市地域おこし協力隊 経験者	
●えひめ暮らしネットワーク通信.....	20
えひめ暮らしネットワーク通信 高木 綾子/一般社団法人 えひめ暮らしネットワーク 参事	
●特選ブログ/shin1さんの日記.....	22
「私のウェルビーイング」 若松 進一/人間牧場主・年輪塾々長	
●“MY TOWN” うおっちゃんぐ.....	24
ふるさとの戦時遺産から戦後80年を考える(西予市) 岡崎 直司/タウンツーリズム講座主宰・近代化遺産活用アドバイザー	
●令和6年度地域づくり活動アシスト事業報告	
ミライの関川を安心安全にするために.....	26
近藤 和明/みらいの関川を考える会 代表	
小学校にチャレンジエリアを造ろう!!.....	27
～「ビオトープ復活大作戦」～ 奥田 育実/ひまわりアート実行委員会 会長	
●Information センターからのお知らせ.....	28
・「えひめ移住応援隊」協力事業者募集中 ・令和6年度移住交流促進事業「えひめまるごと移住フェス」実施報告 えひめ地域活力創造センター	



■表紙のことば

今回の表紙は新居浜市の別子銅山の煙突跡を描きました。

昔に使われていたものが今も残っていて、市民の心に残っている光景は素晴らしいですね。そういった光景の中で、様々な属性の人が煙突という象徴の下で未来を見つめたり、一緒に地域づくりをしたりしているイメージを重ねました。

人は一人ひとり違っていますが、同じ未来を目指してその違いを乗り越えていく中での出会いが力になるのだと思います。

そういった前向きな力が地域の未来を明るくする原動力になるといいですね。

柳原 あや子

多様な人とつながり、多様な幸福を育む地域へ 外部人材との共生がもたらすウェルビーイングな地域づくり

総務省 地域おこし協力隊アドバイザー 鍋島 悠弥

地方創生とウェルビーイング

日本の人口は2008年にピークを迎えた後に減少に転じることとなり、本格的な人口減少社会が始まることになった。地方においては1950年代から人口流出が確認されており、こと人口減少という定量的な変動の観点から捉えられる地域力の低下は、現代においてその深刻さを増す一方である。このような状況の中、2014年に政府は国策として地方創生を掲げることとなった。単なる一点突破型の地域活性化とは一線を画し、中長期的かつ構造的な取り組みに重きを置いていくことが特徴と言えるだろう。地方創生の名の下に、全国各地でさまざまな取り組みが行われ、その多くは、地域の活性化や人材の確保、産業の再生を目指したものであり、特に東京一極集中の是正を核とした移住促進や関係人口の創出など、人の流れを生み出すことに注力してきた。

しかし、先述のように日本は国家としての人口減少に向き合わなければならぬフェーズに入っている。地方自治体に協力隊・関係人口といった外部人材と地域の共生を通して生まれる地域づくりの可能性を、人口減少社会におけるウェルビーイングと定義して論じていく。

定住する「外部人材」との共生がもたらす価値

昨今では、外部人材の存在が希望の芽として注目されている。彼らは、地域に新たな視点や技術、ネットワークをもたらすと同時に、地域に足りなかった役割や価値観を補完する存在でもある。2009年に総務省が創設した「地域おこし協力隊」の存在は特に際立っているだろう。一方で、既存の住民との価値観や生活スタイルの違いが、摩擦やすれ違いを生むこともある。こうした摩擦を乗り越え、共に生きていくためには、外部人材と地域の双方の意識変化が求められる。

とある地域では、地域おこし協力隊が中心となって立ち上げた朝市が、地元の高齢者たちの交流の場となり、現在では地域の風物詩となっている。当初は「何をしに来たのか分からない」と冷ややかだった地域住民も、活動を重ねる中で協力隊員の存在を理解し、互いの信頼が育まれていった。こうした共生のプロセスそのものが、地域にとってのウェルビーイングの実践と言えるだろう。

おいては、移住促進や関係人口の増加が数値目標として取り上げられることも多くあるが、他地域との人口の奪い合いに打ち勝つには限界が見えてきた。これからの地域が自分たちの力で地域力を創造していくためには、現場目線から改めて地域の現状を見つめなおし、単純な人口増ではない地域づくりの在り方を模索していく必要がある。減少する人口を補填する単なる「数合わせ」ではなく、そこで暮らす人々一人ひとりが、自らの生き方を実感し、幸福を感じながら暮らしていける社会を築くこと——すなわち、真の意味での地方創生とは「人の幸せ」を中心に据えた社会づくりであり、地域のウェルビーイングの追求そのものであると言えるのではないだろうか。

人口減少社会におけるウェルビーイングの再定義

近年、ウェルビーイング（幸福度）という概念が注目されている。単なる経済的な豊かさではなく、心身の健康、良好な人間関係、自己実現の機会、安心して

定住しない「外部人材」の可能性

定住にこだわらず、継続的に地域と関わる「関係人口」の存在も、ウェルビーイングの視点から極めて重要である。例えば、都市部で働きながら週末に農作業を手伝う、イベントの運営に関わる、地域の商品を広めるアンバサダーになるなど、関係性の形は実に多様である。このような関係性は、地域にとっても外部人材にとっても、自己効力感や共感、役割意識といった心理的ウェルビーイングを高める効果がある。地域に「もうひとつの居場所」が生まれることで、そこに関わる人々の人生の質もまた豊かになっていく。

関係人口のもう一つの捉え方についても示しておきたい。関係人口は「生み出すもの」「創出するもの」といったように、いわゆる地域への関わり、「人口の戦略」を示す言葉として使われることが一般的である。しかしながら、関係人口は「既存の存在」であったり、「出口の存在」として捉えることもできる。独居高齢者を暮らしを支えているのは、定期的なその生活を支えるために地域を訪問する親類であったりする。この親類たちは「既存の存在」としての関係人口であると言えるだろう。移住者が一身上の都合によりやむを得ない事情で地域から出ざるを得なくなった後も、定期的な地域の行事等の自治に関わって地域を支

暮らせる環境などを包括的に捉える考え方である。前段において、人口減少が避けられないこの現代社会において、「人が減っても、幸せが減らない社会」を目指すこととウェルビーイングには深い関連性があることを提示したが、もう少し深掘りしてみよう。

人口減少は、「人口の適正化」という捉え方もできる。過度な成長競争から解放され、丁寧な暮らしや人とのつながり、地域の個性を大切にするライフスタイルが見直される時代が来ており、ここにおいて地方は重要な役割を担っている。地方は、自然との距離が近く、人との関係性が深いといった特徴があり、こうした地方の環境は、都市部住民から捉えると本来的にウェルビーイングと親和性が高いと言えるだろう。一方で、地域の高齢化や担い手不足、外部との交流機会の少なさ等の課題へのアプローチとして、ウェルビーイングという概念を活かすことができる可能性がある。本稿では、こういった都市部の価値観と地方の現実的な課題をつなぐ役割・手法として——移住者・Uターン者・地域おこし

えていることもある。この場合は「出口の存在」としての関係人口であると捉えることができる。彼ら彼女らの存在もまた、ウェルビーイングな地域づくりのために重要な役割を果たしていることを忘れてはならないだろう。

共生を支える「寛容性」という土壌

外部人材と地域には「寛容性」という力が問われている。これは、異なる価値観や背景を持つ存在を受け入れ、対話を通じて関係を育む力である。寛容性の高い地域では、外部人材が挑戦しやすい風土がある。そうした環境でこそ、創造的なアイデアが生まれ、地域に変化がもたらされる。一方で、寛容性は自然に生まれるものではなく、意図的に、継続的に育てていく必要がある。そのためには、外部人材と地域住民が定期的に集い、互いの考えを話す場づくりが重要となる。お茶会、ワークショップ、地域づくりの対話会など、小さな接点の積み重ねが、共生の基盤となる。

また、行政の果たす役割も大きい。制度設計においても「定住前提」や「短期成果志向」から脱却し、多様な関わり方や長期的な視点を持てるような柔軟性が求められる。さらに、地域内外のつながり役となる中間支援組織やコーディネーターの存在が、共生の潤滑油となるだろう。



選び合える地域社会へ

ウエルビーイングが目指すべきは、「選ばれる地域」ではなく、「選び合える地域」である。つまり、一方通行的に「外部人材が地域を選ぶ・地域が外部人材を選ぶ」のではなく、人も地域も互いに選び合い、関係を築いていくという関係性である。人口減少という構造的な変化を、ただの危機として捉えるのではなく、地域が「人の幸せを中心に据えた社会」へと進化する契機と捉えることが重要である。そのため

「人と人の幸せなつながり」をどれだけ築けるかが鍵となる。そこにこそ、本当の意味での地方創生、そしてウエルビー

イングの未来があるのではないだろうか。

これは、西村吉仁です。昭和52年生まれの47歳で、狩江地域づくり活動センターでの勤務は6年目になります。座右の銘は「金と筋肉は裏切らない」です。さて、近頃はどんな仕事をしてストレスがかかる社会になったと感じています。都会に住めばなおさらだと思えます。狩江ではそのストレスを開放し、本音で語り、素の自分を出せるような地域を目指しています。今回は、狩江のご紹介から始め、狩江に住む方々の人懐っこさや、初対面の方でもすぐに打ち解けてしまうコミュニケーション能力の高さ、これにより実現可能となっている事業をご紹介します。

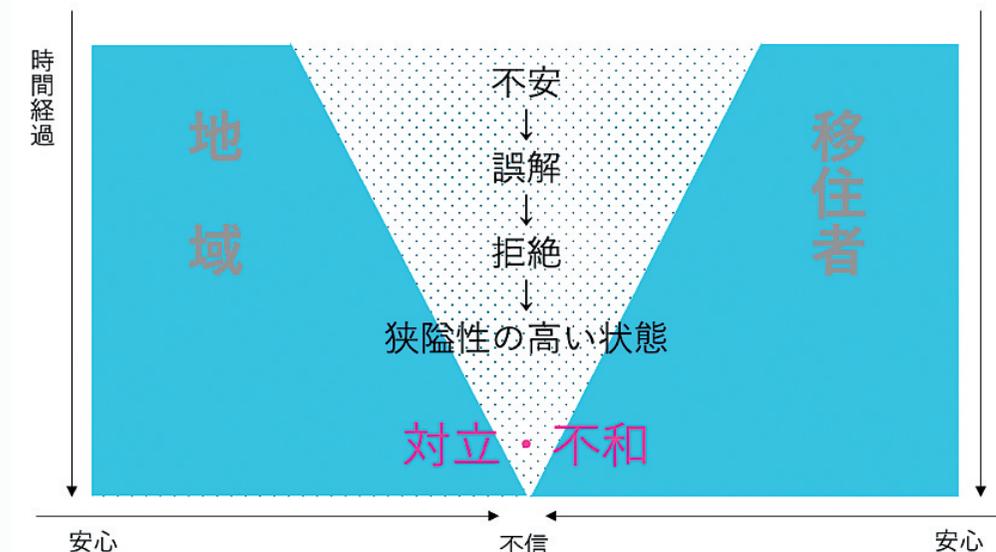


図1. 地域と移住の対立不和状態

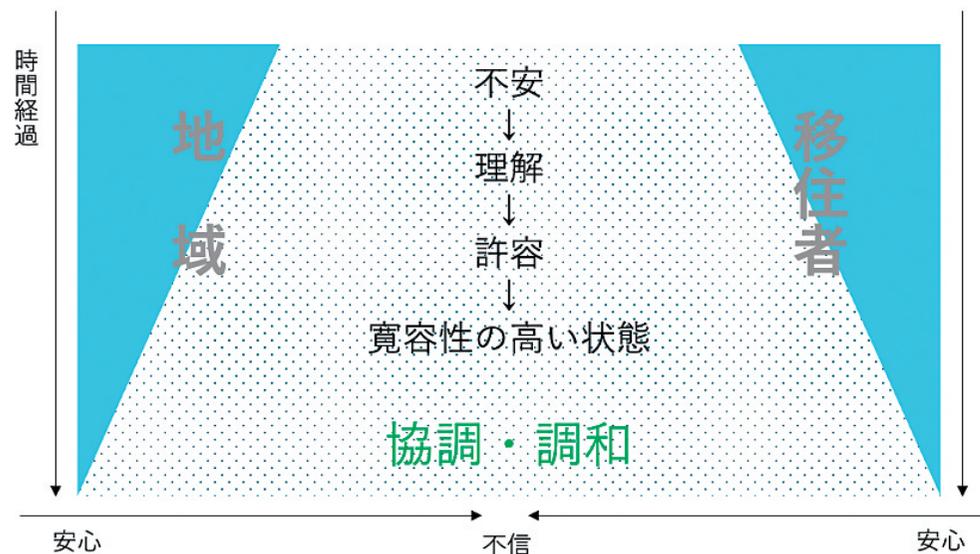


図2. 地域と移住の協調調和状態

特集 1

「心のパンツが脱げるまち」

西予市狩江地域づくり活動センター係長 西村 吉仁



こんにちは、西村吉仁です。昭和52年生まれの47歳で、狩江地域づくり活動センターでの勤務は6年目になります。座右の銘は「金と筋肉は裏切らない」です。

さて、近頃はどんな仕事をしてストレスがかかる社会になったと感じています。都会に住めばなおさらだと思えます。狩江ではそのストレスを開放し、本音で語り、素の自分を出せるような地域を目指しています。

今回は、狩江のご紹介から始め、狩江に住む方々の人懐っこさや、初対面の方でもすぐに打ち解けてしまうコミュニケーション能力の高さ、これにより実現可能となっている事業をご紹介します。

愛媛県西予市明浜町狩江地区について

狩江地区は、宇和海と段々畑に囲まれた温暖な地域です。人口は約700人で、主な産業は柑橘栽培や養殖漁業等、自然と共に生活を営んでいます。

その中にある狩江の段々畑は、石灰岩を積み上げて作られ、それらを含む農漁村景観が国の重要な景観や日本農業遺産に選定されています。

狩江の代表的な伝統文化は2つ挙げられ

ます。一つ



絶景!段々畑と宇和海!

目の狩江地区の秋祭りは、10月の第4土曜日に開催され、牛鬼や神輿、お船組や五つ鹿等の練りがお祭りを盛り上げます。二つ目の渡江地区の盆踊りは、8月14日に開催され、「歌舞伎くずし」とも呼ばれ、歌舞伎調の化粧と華やかな衣装を身にまとい、歌舞伎の名場面を演じます。

しかし、狩江地区も人口減少や高齢化の波が押し寄せ、1994年に1190人いた人口は2025年には681人(5月末)となつていきます。この波に打ち勝つべく「かりとりもさくの会」と「狩江地域づくり活動センター」、この両輪が軸となり地域づくり活動を行っています。

かりとりもさくの会と交付金制度

かりとりもさくの会は、住民主体で人口減少・地域課題解決を行うことを目的にスタートした「せいの地域づくり交付金制度」ともに設立され、平成23年から活動を行っています。このような組織が西予市内の27の旧小学校区ごとに組織され、地域づくり交付金を原資に地域活性化事業を行っています。

地域づくり交付金額は、均等割・人口割・面積割により決定し、かりとりもさくの会へは、令和6年度に基礎型交付金191.5万円が交付されました。この交付金を各団体活動や文化継承事業、本部運営経費に充てています。さらに、この基礎型交付金とは別に、手上げ型交付金も創設され、基礎型では補えない事業(移住定住・関係人口構築等)を実施しています。

公民館から地域づくり活動センターへ

旧狩江公民館が令和5年より「狩江地域づくり活動センター」へと名称変更し、社会教育の推進とともに、住民と行政との協働による地域づくり活動の拠点としての役割を担っています。

当館はモデル館に指定され、令和2年度から活動センターとして取り組みを行ってまいす。この制度の最大の特徴は、これまで公民館に配置されていた主事(市職員)に加え、地域づくり組織(かりとりもさくの会)の地域任用職員が同じセンター内で働く、ということ(他にも色々ありますが、省略)。これにより、行政と地域づくり組織の持つそれぞれの長所を活かし、より活動が活発となりました。

現在、狩江センターの事務所には、センター長・センター主事・会計年度職員・地域任用職員・地域おこし協力隊の5人が在籍しています。

事業紹介

① 修学旅行の受入れ

令和3年度から修学旅行生の受入れを始めました。昨今都市部の学校では、観光地ではなく、田舎での生活体験や自然体験、人の温かさや優しさを体験させることを目的に、地方での民泊を取り入れた修学旅行にシフトしています。これは、修学旅行生だけでなく、受け入れる地域のメリットも非常に大きなものとなっております。

特に経済効果は大きく、生徒4人を2泊受け入れると約6万円の謝礼を受け取ることが出来ます。これまで田舎体験ではボランティアに近い報酬しか得られなかったものが、正当な対価を得られる事業となっております。また、受入家庭には移住世帯も多く、都市部の子供たちに狩江の良さを語ってくれていました。

狩江の生きる道

これまで田舎では、「こんな遠いトコに来てもらってありがとう」とそんな気持ちで都市部の方々をもてなし、過分の米や野菜や果物を渡して帰ってもらっていました。この米や野菜、果物、優しさを価値(お金)に換えていかなければならないと思いました。

狩江のみかん、魚、優しさは、超一流です。超一流を維持するための道のりにも大きな価値があり、その道のりに価値を見出すことが狩江の生きる道だと思っています。

また、「お金が全て」と言っても過言ではないと思っています。「地域づくり」ボランティアでは長続きしません。活路を地域外交流に見出す必要があると思っています。農業や道路維持管理作業、農業や漁業体験等、これまでお金を払っていた作業を、価値観や方法を変えることで、お金をいただく体験として提供しています。

ただ、これらを実施する際に、地域の方々が最も負担に感じるのが、受付や精算等の事務作業です。この作業を、かりとりもさくの会が行うことで、会にも手数料が落ち、地域の方々も負担がなくWin-Winな関係が築けます。

また、田舎の方々にはサービス精神が旺盛過

す。受入れ開始から5年で、訪れた修学旅行生は1200名を超えました。

② 田舎体験の受入れ

修学旅行の受入れとともに、一般のお客さまの受入れも行っています。当初は学校関係がメインでしたが、今ではインバウンドのお客様やワーケーションでのご利用も増えました。こちらでは地域の景観や柑橘業、タコ漁や養殖漁の体験、海の幸や山の幸の堪能、そして地域の方々とのふれあい等を提供しています。令和6年度の来客者数は、修学旅行生を除いても約600名でした。



タコ漁体験で、獲ったどー!

③ 大学生の受入れ

他の過疎地域同様に、全ての地域事業が継続困難になっており、元気な大学生にそれを補っていただいています。農道清掃や地域行事のお手伝い、農繁期における農家への支援等、今ではなくてはならない存在です。さらには、柑橘やみかんジュースの販売、地域づくり事業の企画にも関わっていただくようになりしました。

この関りは、学生にとつては就活にも有利に働いており、多くの学生が卒業後も狩江にきて、金額以上のことをしてしまいがちです。それだと継続は困難です。正当な対価が地域へ落ちるよう、我々がその役割を務めたいと考えています。行政からの補助金や交付金は永続的なモノではありません。自分たちで稼げる武器を持ち、磨いていく必要があると思っています。

地域外人材交流による心の変化

地域外人材との交流は、金銭的な効果だけではありません。お客さまは必ず狩江を褒めてくれます。「景色がいい」「みかんや魚が美味しい」「星がきれい」等。それが住民の地域愛をさらに強くしてくれます。私自身がそうでした。「こんな何もない田舎」と思っていた中で、地域を褒めていただく、地域への想いは変わっていききました。それは、他の方々にも広がっている気がします。

当初、大学実習の受入れを渋っていた農家さんも「次はいつぞ?」と聞いてくれるようになりました。地域の方々が自分から地域の自慢をするようになりまし

た。地域外人材交流に



サカナ、サバクノ、ハジメテデス!

やってくる来てくれています。現在、年間のべ200名近い学生が狩江に来てくれています。



石垣修繕、100人乗っても大丈夫!なはず!

④ 地域おこし協力隊

人口減少や高齢化、第一次産業の衰退等、これらを一気に解決に向かわせてくれるのが「地域おこし協力隊制度」です。この制度が、都市部から地方への移住を後押ししてくれます。

西予市は、会計年度任用タイプに加え、個人事業主タイプの制度を導入しています。これにより地域課題に直接的に取り組むことが可能となり、隊員が3年後に独立するための可能性が大きく広がりました。

当地区には、卒業した隊員が3人、現役が2人いますが、全員狩江在住です。内訳は、「特産品販売1人」「みかん農家2人」「石垣修繕士1人」「田舎の価値をお金に換える人1人」の5人です。家族を合わせると14人の移住者です。3年間の修行プログラムで大

は、移住者の方々にも加わっていただいております。これが更なる移住者の獲得にも繋がっています。

地域外人材との交流を継続するためには双方にメリットが必要です。地域側にはお金はもちろん地域への貢献等を。訪問者にはお値段以上の価値や満足度を。繋がり続けられる地域づくりをこれからも目指し続けます。

今後の目標 ふるさと納税と法人化

農漁業体験や田舎暮らし体験を、ふるさと納税の返礼品として展開します。西予市がふるさと納税の一部を地域に還元する仕組みを作ってくれました(詳細省略)。今後はこれにも注力します。

また、修学旅行の受入れ等により、地域経済が循環し始めたことを受け、法人化を進めています。対外的な信用度も向上することから、今年度中には立ち上げた

心のパンツにとどまらず、本物のパンツを脱いでしまいたくなるような、開放感のある地域を目指します(笑)。



協力隊卒業後、みかん農家となった渡辺夫妻!

特集 2

地域を動かす「つなぐ力」 共創の鍵を握る地域コーディネーターの役割とは

NPO法人Eyes 光野 達也

人口減少により広がる、地域との関わり方

全国的に人口減少と少子高齢化が進む中で、地域の担い手不足は深刻な課題となっています。特に地方においては、大学進学や就職をきっかけとした若年層の都市部への流出は大きな痛手です。その影響は地域経済や産業の担い手労働力の不足だけでなく、祭りといった地域行事の維持が困難になるなど、地域コミュニティの運営においても深刻な影響を与えています。

そんな中、各自自治体では移住促進施策に力を注ぐほか、地域外に住みながらも地域に関わる関係人口（以下、外部人材と記載）の創出に向けた動きが活発化しています。旅行、ふるさと納税等のライトな関わりから、副業兼業による協働など仕事を通じた繋がりが、二拠点生活といったように、地域との繋がりは非常に多様化していると感じています。

地域内外の繋ぎ手となり、挑戦を応援する地域コーディネーター

私は普段、「地域内外を問わず挑戦意欲のある人材」と連携や協働により新たなことに取り組みたいと考えている地域の組織（企業や自治体、NPO、学校等）を繋ぎ、彼らの活動をサポートする仕事をしています。例えば、地域の中小企業に大学生を繋ぎ、1か月程度のプロジェクトに挑む「長期実践型インターシッ プ」や、高校生の場合は「探求科目」で地域とのプロジェクトに挑戦することもあります。社会人の場合は副業兼業など仕事を通じて繋がるケースや、祭りの人材不足に悩む自治会に人を繋ぐ取り組みまで、一言で「繋ぐ」と言っても様々です。

このように、このように「繋ぐ」役割の役割を「地域コーディネーター」と我々は呼んでいます。副業、伴走すること、個人や一組織では進められなかったことが前に進められるようになる、動き出せる」といった地域へのインパクト

て、そのプロジェクトを通して外部人材側がどんな成長機会を得られるのかや、パフォーマンスを最大化するためにどんな研修や見守りの体制を組むのか等、外部人材の視点からも魅力的な機会を設計します。これにより、求める人材像や企業としてプロジェクトの先に実現したい未来像等を事前にわかりやすく提示することができるため、ミスマッチングの回避に繋がる他、成長機会や実践経験を求める学生にとって魅力的な挑戦の機会として地域への関わり方が提示できます。



古民家オープンに向けインターン活動を行う大学生

サポートする仕事をしています。例えば、地域の中小企業に大学生を繋ぎ、1か月程度のプロジェクトに挑む「長期実践型インターシッ プ」や、高校生の場合は「探求科目」で地域とのプロジェクトに挑戦することもあります。社会人の場合は副業兼業など仕事を通じて繋がるケースや、祭りの人材不足に悩む自治会に人を繋ぐ取り組みまで、一言で「繋ぐ」と言っても様々です。



地域の中に入り、田植えに参加する高校生たち

ならないこと、おおまかな資金繰り等、日常生活では得られない気づきと学びを得ているようです。

繋ぐだけで終わらない。決められた期間で成果を出すための伴走支援

ここまで、繋ぐことにフォーカスしてきましたが、本来繋ぐことは地域との関わりが始まりにすぎません。繋がった後に、本来想定していた通りの成果が見込めそうか、成長の実感を得ながら、高いパフォーマンスを維持できているかといった見守りとテコ入れを行う「伴走支援」が重要です。

長期実践型インターンシップのケースにおいても、些細なミスで自信を喪失してしまうことや、活動内容にマンネリ化を感じてモチベーションが低下する等の事象が発生することもありますし、企業が繁忙になり学生にあまり工数を避けなくなる等プロジェクトの危機が訪れるシーンもあります。この際に、両者だけで問題解決にあたるのではなく、中立の立場のコーディネーターが間に立ち、お互いが直接伝えづらいことも含めてヒアリングを行い、原因の特定や解消に向けた打ち手の検討をサポートすることで、プロジェクトを正常な流れに戻していきます。

外部人材との協働経験があまりない地域も多い中で、丁寧な関わりしろ（プロジェクト）の設計と、見守りと適切なタイムミングでのフォローを行う地域コーディネーターの役割が、地域には必要なのではないのでしょうか。

や「関わってくれた人が地域を好きになる、継続的に関わってくれる」などの効果も出ており、私はこの繋ぐ役割にやりがいを感じています。



地域の課題解決を考えるワークショップで議論する住民と地域外の若者

ただ繋ぐのではなく、地域の魅力的な関わりしろを創出する

しかし、ただ繋げばいいというものでもありません。外の人が関わりたいと思うような「関わりしろ」をつくることこそが重要です。

例えば、実践型インターンシップでは事前に地域側の受入企業と入念な打ち合わせを実施し、企業の課題やチャレンジしたいこと等を踏まえ「どんな役割を持った人が入ってくると良いか」や、「どのようなスケジュールを進めるか」等、事前に外部人材の関わり方をプロジェクトとして設計します。加え

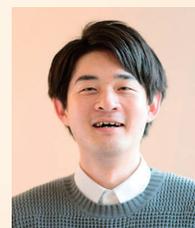
人口減少が加速する中で、外部の力をうまく地域に繋ぐために必要なこと

今後、より一層の人口減少が予想される中、移住という限られたパイの奪い合いではなく、住民ではないが地域活動にコミットしてくれる関係人口の創出と定着が今後のカギになっていくことは想像に難くありません。

関係人口の創出と定着のために地域側に求められるのは、前述した地域コーディネーターのような「魅力的な関わりしろ（プロジェクト）」をつくり、繋ぎ・伴走する役割を持った人材を地域内で育成していくことに加え、外部の人材との協働経験を重ねることです。「外部の力を地域が受け入れ慣れること（助けられ慣れること）」だと考えています。

「これくらい自分たちでできる」「助けてもらっても何も返せないし」といった思考を持ちがちなのもいらつしやると思います。本来適切にプロジェクトを設計することができれば、受入地域だけでなく外部人材にもメリットのある関わり方がデザインできるはずです。

今後も地元西条市を中心に、地域コーディネーターの一人として、自分たちの地域の魅力的な関わりしろを設計しながら、繋ぎ、見守る役割を担っていきますが、その先には誰もが当たり前前に繋がりをデザインできる地域になり、気軽に協働しながら新しいチャレンジに向かつて行動できる、そんな地域にできたらと思っています。



官民がつながる、まちづくりの実験場

ゆりラボは、町民と行政、そして町外の多様な人材が協働する中間支援組織です。その原点は、2018年に始まった「ゆりラボアカデミー」。町役場職員のプロジェクチームの動きが住民や有志に広がり、地域資源を活かしたビジネスや社会課題の解決を目指す場として、町内外から多様な人材が集まりました。

住民が日常に感じている町の課題と行政が日々向き合っている町の課題には時としてズレやずれの違いが起こることも。官民協働プラットフォームフォームとしての独自の活動拠点は、行政の人事異動や年度方針の変化に影響されず、民間の柔軟性やフットワークの軽さを最大限に発揮するために設置されました。

実験主は、あくまで久万高原町で暮らす人。住む人、働く人、学ぶ人、訪れる人など、久万高原町で活動する人です。ゆりラボは、官民協働プラットフォームとして住民と行政の間をつなぐ立場で町の様々な地域課題の解決を目指しています。

実験ができる施設の必要性

ゆりラボ拠点は、くままち商店街の中にあ



ヨイラボ営業の外観

「室」が開かれていたことは、大変有効なことであったと思います。ゆりラボには人がいて当然、という感染予防対策下なのに人が安全に集まれる最高の状況が生まれ、ゆりラボは注目されました。

2022年〜2023年は、ゆりラボを拠点に活動していた地域おこし協力隊の『久万高原産ホップを使ったビール開発プロジェクト』もあり、風土を活かした特産品づくりでも注目されました。

2024年、「タネマキ食堂」がチャレンジ営業を開始、金曜夜には町内に無いBARを自分たちで開くべく「ヨイラボ」の営業を

ります。日用品店だった空き家を、補助金等を活用して改装し、

2021年5月にオープンしました。昔ながらの雰囲気を残した畳スペース。単独でも大人数でも作業しやすいコワーキングスペース。畳スペースとコワーキングスペースの間には、チャレンジキッチンとしても使えるコンパクトなオープンキッチン。土佐街道沿いの景観を壊さないよう、木造の外観を残した親しみやすい建物です。



改装直後のゆりラボ畳エリア

しかし、当初は新型コロナウイルスに対するの厳戒感染対策中で利用者はほぼいません。数カ月が経つとようやく、「コミナス（コミュニティナース）保健室」の住民利用が増えてきました。コミナス保健室は、ゆ

りラボアカデミー第1期での「病院外でも看護師が住民にできることがあるはず」という提案に基づき、提案者を中心としたコミナスチームが行う「まちの保健室」です。感染予防対策で人と人の距離が物理的にも精神的にも離れていた当時、家族や自分の心身に不安があったときに、「コミナス保健



畳スペースレンタル活用例



コミナス保健室でスマホ講座

開始し、飲食を通して町内を活性化させるチャレンジをスタートします。自分の実験だけでなく、他者の実験をいろいろな立場で体験できるのもゆりラボの特徴です。

できることを持ち寄った「タネマキ食堂」——スキルは宝

「タネマキ食堂」は、毎月2回だけ営業するベーグル専門の食堂です。久万高原町産の清流米を使った米粉ベーグルを中心に販売し、町内外から多くの人が訪れます。



タネマキ食堂のベーグルランチ

この食堂は、単なる飲食の場ではなく、地域の食材や人の魅力を再発見し、共有する「まちの食卓」として機能しています。運営には子育て世代の女性たちが関わり、それぞれの得意を活かして店づくりを行っており、地域に新たな働き方のモデルも提示しています。

高校生と地域がつながる「放課後ラボ」

地元の愛媛県立上浮穴高等学校と連携した「放課後ラボ」では、高校生が地域課題に向き合い、自らのアイデアを実践。メンターや地域の大人たちと協働しながらプロジェクトを進め、若者の視点とエネルギーが、地域に新たな風を吹き込んでいきます。



放課後ラボ報告会の後の一枚

挑戦が芽吹く、まちの未来へ

「ゆりラボ」は、施設や事業の集合体ではなく、人と人が出会い、語り合い、挑戦を始める「実験場」そのものです。2025年3月、「コミュニティナース事業」「放課後ラボ事業」は、実験から実践のフェーズに入りました。ゆりラボから独立し、町の施設を活用しながら活動しています。8月には、「タネマキ食堂」もラボ近くの国道沿いに実店舗を構える予定です。

また、新たな地域おこし協力隊が情報発信ミッションで着任し、愛媛県久万高原（くまこうげん）町のひと・もの・ことを伝える繋がるメディアである「くまこうげんプラネット」がスタートしました。起業、教育、食、交流——さまざまな切り口から、地域の未来を自分たちの手でつくるうとする人々の姿があります。



特集 4

「祭り×関係人口」で地域コミュニティをアップデートする

公益財団法人えひめ西条つながり基金 事務局長 安形 真

「盆と正月には帰らなくても、祭りだけは帰ってくる」。愛媛県西条市で昔から語り継がれるこの言葉のとおり、市民の一年は10月の西条まつりを中心に動きます。300年の歴史を誇る祭りには現在およそ80台のみこし・だんじりが集結し、太鼓と鉦（かね）の響きが町の鼓動そのものになります。農家は稲刈り、企業は生産計画、学校は行事の日程を祭りに合わせて調整し、当日には「こんなに若い人がいたのか」と驚くほどの人でまちがあふれます。祭りは世代も職業も超えて市民のアイデンティティを束ねる「精神のインフラ」です。だんじりの屋根飾りや幕の文様、提灯の配置に至るまで「わが町らしさ」が息つき、それを誇



西条祭り

りに担ぐ瞬間こそが「自分は西条の人間だ」という帰属意識をいっそう強めてきました。持続性を脅かす担い手不足と資金難

しかし近年、その誇り高い営みは静かに揺らぎ始めています。少子高齢化と若者の流出により昇き夫（かきふ）が不足し、自治会を支える世代も高齢化が進行しています。担い手が減れば一人当たりの負担が増え、外部人材に頼らざるを得ない状況になります。酒を酌み交わしながらの運行で起こり得るトラブルや祭りの「不文律」を外来者が理解できるかへの不安が根強く、他地域の協力を得るハードルは依然として高いままで。景気停滞と世帯数の減少は寄付額にも影響を及ぼし、だんじりの修繕や新調が困難な自治会も出てきました。行政の支援は「原則自治会の自主運営」という方針のもと限定的にとどまり、各地区は自助努力だけで祭りを守る厳しい現実と直面しています。コロナ禍で祭りが途絶えた地域では、コミュニティの結束が弱まり、有事の際の不安が増したという声も聞かれます。祭りが暮らしを支えてきた西条にとって、その基盤が揺らぐことは地域全体のウェルビーイングを脅かす大きなリスクだと言えるでしょう。

OMATSU-REBOOT CAMP——外部と共に紡ぐ再生の仕組み

この危機を転機へと変えるべく、公益財団法人えひめ西条つながり基金は2024年夏「OMATSU-REBOOT CAMP」を立ち上げました。約3か月のプログラムでは、まず参加者に祭りを体験してもらい、地域との関係性を築いたうえでオンラインを中心に議論を重ね、市外在住者9名と地元住民が4つの祭礼地区——紺屋町・西町西組・田滝地区・伊予提灯職人——で協働します。東京のIT企業勤務、静岡の大学生、松山在住のエンジニアやデザイナーなど多彩な顔ぶれが、外部視点を生かして

「初心者がよく楽しめる祭りにするには」「職人育成の障壁は何か」を言語化しました。商店街ではマンション住民への参加導線づくり、小



中間報告会の様子

松地域ではQ&Aサイトによる不安解消、田滝地区ではお簾（れん）踊りを残す保存動画、提灯職人チームでは提灯づくり教室と分業化による育成体制など、具体策が次々に提案され、実際に動き始めているものもあります。プログラム修了後も9名全員が次回の祭り参加を表明し、継続的に各地区へ足を運ぶ参加者も少なくありません。「顔の見える他所者」が加わったことが祭り当日の人手確保はもちろん、災害時に迅速に駆けつける支援ネットワークとしても機能し始め、住民の安心感が着実に高まっています。



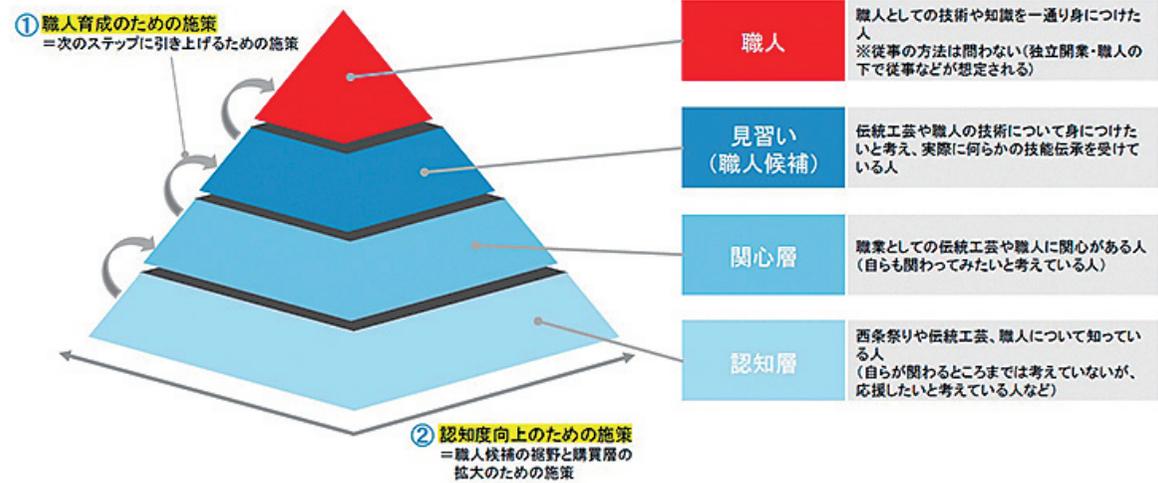
最終報告会の集合写真



お簾踊り



紺屋町 織田さん 三塚さん



職人チーム発表資料より抜粋

寄付と関係人口を循環させる未来ビジョン

OMATSU-REBOOT CAMPの真価は、単発の盛り上がりで終わらせず、「へ資金」と「へ人」の循環を生み出す点にあります。えひめ西条つながり基金では、自治会ごとに寄付を税額控除付きで集める「まつりのチカラ応援基金」を立ち上げました。取り組みの柱は2つ——「昇き夫マッチング」と「だんじり新調基金」の設置です。

まず、深刻化する昇き夫不足には、受け入れ側と参加希望者の双方をきめ細かくサポートし、誰もが安心して祭りに参加できる体制を整えます。次に、だんじりの新調や大規模修繕に必要な費用を基金で賄い、寄付者には税額控除という具体的なメリットを提示することで、継続的な支援を促進します。これにより祭りの存続可能性が大きく高まります。

参加者アンケートには、「自分の専門性が地元で生かされた手応えがあった」「法被を着たら家族だと言われ、胸が熱くなった」といった声が寄せられ、外部協力者にも確かなウェルビーイングが生まれています。今こそ、祭りを地域の「楽しみ」にとどめず、「共に育てる共有資産」として位置づけ直すときです。多様な人々が汗をかき、学び合い、誇りを共に更新し続ける仕組みこそが、持続可能なコミュニティの鍵となります。西条で芽生えたこの小さな成功体験を県内各地へ広げ、伝統行事を核にした共生コミュニティづくりに、皆さんも一歩踏み出してみませんか。



5 特集

宮島で持続可能な観光地域をめざす
「千年先も、いつくしむ」プロジェクトの推進

宮島の地域特性

宮島は、千年以上の長い時間をかけ様々な文化を取り込み、この島ならではの文化や民俗を築き上げてきました。一方で島の自然は今日に至るまで、島をいつくしむ人々の努力により守られ、太古からそのままの姿で残されています。

「神をいつくまづる島」として、厳しく守られてきた自然や文化、歴史そのものが宮島の普遍的価値であり、この価値を守り伝えてきたのは、人々の「島をいつくしむ思い」に他なりません。だからこそ宮島の「あるべき姿」といえます。

しかし、急激な人口減少・高齢化、さらに生活様式の急激な変化、かつてない来島者の増加は、経済効果という名の下、文化や民俗、伝統の消失に拍車をかけています。

この宮島の普遍的価値を守り継承していくためには、宮島に関わる全ての「人」の力が必要です。さらに島を訪れる「人」と関わりながら、島に暮らす人が心豊かに暮らせる島を創造し、育んでいくために「ありたい姿」を導き出す

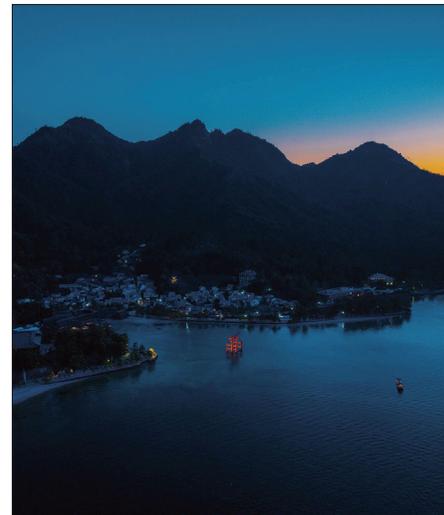
必要があります。

「千年先も、いつくしむ」プロジェクトの推進

廿日市市は、宮島まちづくり基本構想（令和2年3月策定）を道標として、宮島で「住んでよし、訪れてよし」の持続可能な観光地域づくりをめざしています。

その取り組みを「千年先も、いつくしむ」

プロジェクトと命名し、先人から受け継がれてきた普遍的価値や魅力を広く国内



千年先も、いつくしむ。 島の光にも月にも照らされてきた、島そのものが御神体だから。ここに照らすすべてを敬う思いは、時を超えてつなげたいから。
宮島 MITAJIMA The island itself is an object of worship which has been illuminated by both the sun and the moon. The feeling of respect for everything that dwells here is because we want to connect to it beyond time.

プロジェクトポスター



「千年先も、いつくしむ」プロジェクトページ

IoTスマートごみ箱を活用したレジリエントな宮島地域づくり

外に発信しています。さらに、令和5年4月には環境省の「ゼロカーボンパーク」の登録、令和5年10月から、観光客の増加による負荷を軽減するための財源として、法定外普通税「宮島訪問税」を導入しています。

これまで、宮島では、島内に生息する鹿がごみ箱からごみをあさり散乱させることで、公衆衛生や景観への影響、鹿の健康被害の問題が指摘されてきました。このため、公園や公共施設に20か所以上あった公共ごみ箱は、現在5か所となっています。

一方で、インバウンドを中心とした観光客の増加、店舗の業態転換による「食歩き」やテイクアウトフードのための使い捨て容器の利用増加などにより、飲食後の空き容器や串、さらに飲み残しなどのごみ量が増加しています。

こうしたごみの多くは、宮島フェリー桟橋にある公共ごみ箱に捨てられていますが、その他の場所では、公共ごみ箱が減少したことにより、島内に点在する石灯籠の脇や飲食店のトイレなど人目に付きにくい場所への「置

ことにより、燃えるごみ量が減少しました。

③ごみ削減スローガンの掲出、マナーの啓発

観光客に対し、宮島では、ごみになるものを「持ち込まない」、「増やさない」、「散らかさない」をスローガンに、マナー啓発を行うとともに、ポスターやデジタルサイネージ等で公共ごみ箱の設置場所、ごみ分別に関する情報等を伝え、公共ごみ箱への「集め捨て・分け捨て」を誘導しました。

②ごみの「散らし捨て」への抵抗感を高める。

ごみの散乱防止、ごみ収集作業の効率化を図り、あふれることのないきれいな公共ごみ箱の環境を保持することにより、観光客が「散らし捨て」への抵抗感を感じるようになりました。

宮島まちづくり基本構想の計画的・円滑な推進

世界遺産厳島神社を擁し、また全島が国立公園でもある宮島が、唯一無二の一流の国際観光拠点として、重要性を高めていくためには、多様な人々が積極的に宮島まちづくり基本構想に基づく取組みに参画し、立場を超えて互いの資源・課題を共有しながら、想いを一つにして対話を重ね、協働し課題解決を目指す地域社会の実現が必要です。

多様性や信頼性に基づくつながりにより幸福感を得られるプラットフォームの構築に向けて動き始めています。

広島県廿日市市宮島企画調整課 佐々木 正臣

宮島で、ごみになるものは減らしましょう。

Please help reduce all forms of garbage on Miyajima.

宮島 千年先も、いつくしむ。 MITAJIMA

宮島に渡る前は、
Before going to the Miyajima.

ごみを、持ち込まない。
Please don't bring garbage here.

運賃箱にごみは捨てません。
Please throw away your trash before leaving the island.

宮島に渡ったら、
After leaving Miyajima.

ごみを、増やさない。
Don't create unnecessary waste.

無用なプラスチックは持ち込まない。
Refuse unnecessary plastic bags.

宮島で出たごみは、
Recycling on Miyajima.

ごみを、散らかさない。
And don't litter. Thank you!

ごみはきちんと分別しましょう。
Separate your garbage properly.

ゴミ削減スローガンの掲出

き捨て・隠し捨て」、ごみのある場所に別の人がまたごみを捨てる「ポイ捨て(ごみ)がごみを呼ぶ状況」も多く発生することとなりました。

こうした中、宮島地域で店舗を営む事業者の有志により、他店で発生したごみの店頭回収、回収用ワゴン車を活用した町中での声かけ収集、ごみの拾い集め活動も始まっています。

宮島のごみを削減していくために、観光客の利便性を確保しつつ、自然環境の保護や景観の保全、鹿との共生など宮島地域の特性に配慮したごみ捨ての「合理的仕組み」を構築し、ごみを捨てる人の「能動的行動」を誘導することで、宮島に暮らす人、事業を営む人、訪れる人がごみ削減の課題を「自分ごと、みんなごと」として取り組む、総合的なごみ対策を次のとおり実施しました。その取組みの成果は次のとおりです。

①「IoTスマートごみ箱」SmartGO(スマゴ)の設置

観光客の動線上にごみの状態を遠隔で監視できるスマゴを新設することで、観光客のごみに対する安心感、満足感の評価は向上しました。また、「置き捨て・隠し捨て」「ポイ捨て」ごみが減少しました。

②「飲み残し専用ボックス」の設置

飲み残し等の水分が適正に分別された



TOTO宮島おもてなしトイレに新設したIoTスマートごみ箱

地域とつながり地域に学ぶ ～愛媛大学社会共創学部 だより～

ものづくりで 課題を解決

愛媛大学社会共創学部
産業イノベーション学科
西川 祥平



「できない」を「できる」に変えるものづくり
～障がい者用ゲームコントローラー開発が拓く
未来～

愛媛大学 社会共創学部 産業イノベーション学科 ものづくりコース4回生の西川祥平です。幼い頃からものづくりに惹かれ、本学科の自由度の高いカリキュラムに魅力を感じて入学しました。産業イノベーション学科では、実践的な学びを重視し、地域課題に取り組み講義が豊富に用意されています。私自身、その中で障がい者向けのゲームコントローラー開発というテーマに出会いました。



現地でのヒアリング

異なったり、材料の選定や加工の過程においても、数多くの挫折を経験しました。授業で得た基礎知識に加え、講義の進捗報告会を通して、教授や先輩方からのアドバイスを参考に、多くのアイデアを出し、テストし、利用者のフィードバックを受けては改良を繰り返しました。こうして何度も設計を修正し、利用者の負担をできるだけ軽減する形へと進化させました。完成したコントローラーは、これらの試行錯誤を経て、以下の特徴を備えるに至りました。机と一体型でコントローラーに傾斜をつけることで、身体を預けながら楽に操作できる設計です。さらに、手形に合わせてオーダーメイドのレバーを装備し、最小限の握力で操作を可能にしました。ボタン配置と向きも利用者の姿勢に合わせて最適化し、指先の移動距離を抑える工夫を凝らしています。また、耐久性を高めるためコントローラー本体にアクリル板を採用し、長期間の使用に耐える頑丈さも実現しました。これらの工夫により、机に肘を乗せたままゲームプレイができるようになり、利用者のゲーム中の背筋も自然に伸びました。

プロジェクトとの出会い…地域共創が生んだ 新たな挑戦

この障がい者向けのゲームコントローラー開発は、愛媛県観光スポーツ文化部地域スポーツ課と県内企業である株式会社デイスピリット様が進めるeスポーツ振興事業の一環としてスタートしました。手足の自由が制限され、通常のコントローラーではゲームプレイが難しい障がいを持つ方々のため、オーダーメイドのゲームコントローラー開発が進められていたのです。私は、愛媛県の取り組みとしてeスポーツを盛り上げていることや、eスポーツがスポーツ競技として世界的に認識され、オリンピックの正式種目入りも視野に入れられるほどの影響力を持つようになっていて、障がいを持つ方々がeスポーツに参加するための環境が不十分であり、障がい者専用のコントローラーは極めて少ないという現状を知りました。そこで私はプロジェクト

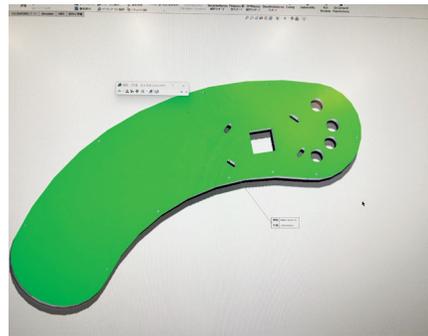
演習という課題解決の授業で、幼い頃から「ゲームが好き」「デバイスに興味がある」という自身の特性を最大限に活かせると思いついた。障がい者用のゲームコント



完成したコントローラー

利用者の反応と筆者の学び…ものづくりの意義と喜びを実感

完成したコントローラーを納品した際、「ありがとう」と笑顔で感謝の言葉をいただきました。お見送りには、動かしづらい片手で力強く手を振ってください、その光景は私にとって、ものづくりの真の喜びと意義を強く実感させてくれるものでした。自分たちが作ったものが、誰かの「できなかったこと」を「できる」に変える瞬間を目の当たりにし、製造や設計が持つ社会的な意味を深く理解することができました。このプロ



3D-CADでの設計



実際にプレイしてもらった様子

コントローラー開発に参加しました。今治に住む障がいを持つ方の「鉄拳をプレイしたい」という声に応えるべく、現場に飛び込みました。障がい者のためのコントローラー開発…固定概念を打ち破る試行錯誤



コントローラーを使用している様子

今回製作する対象の方は、左手とその指先の操作のみが可能で、その他の部位をうまく動かさない現状でした。片手で従来のコントローラーを操作しようとすると非常に操作しづらく、ゲーム中は背筋が丸まってしまうという課題を抱えていました。私はヒアリングを重ね、彼の身体的特徴や姿勢を想定しながら設計に着手しました。コントローラー開発の道りは、決して平坦ではありませんでした。初期段階では、設計が開発者の「ひとりよがり」に陥ったり、ユーザーのニーズが十分に考慮されていなかったりと、多くの失敗を経験しました。特に、従来のコントローラーの「固定概念」とらわれてしまい、斬新な発想が生まれにくいという壁に直面しました。また、使用者と施設の職員の間で求める機能が

プロジェクトを通して、3D-CADや各種加工技術など、実践的なスキルを数多く身につけることができ、大きく成長できました。何よりも、利用者の目線に立つことを意識し、使用環境や要望を丁寧にヒアリングするなど、利用者に寄り添った設計、すなわち、ひとりよがりではない、「ひとの役に立つものづくり」の大切さを学ぶことができました。今後も社会のニーズに応える製品開発に携わりたいという強い思いが芽生えました。

今後の展望と未来の愛大生へ

現在は、この研究開発を2回生の後輩が引き継ぎ、別の障がいを持つ方のためにオセロ用コントローラーの開発に着手しています。最後に、これから愛媛大学社会共創学部を目指す皆さんに向けて、産業イノベーション学科の魅力を紹介いたします。産業イノベーション学科は学生一人ひとりの「やりたいこと」に「本気で取り組める環境」が提供されています。この環境は、学生が自身の興味や特技を最大限に活かし、「実際に誰かの役に立つもの」を具体的な形にすることを可能にします。特に私は「少人数制」であるため、先生方との距離が非常に近く、学生は手厚いサポートを受けながら学ぶことができる環境や、「自由度の高いカリキュラム」を魅力に感じています。自身の興味関心に基づいて学びの方向性を柔軟に調整できるため、画一的な教育ではなく、個々の才能と情熱を深掘りできる環境が整っていると学生生活を通して感じています。



『地元で生きることが、自分にとってのWell-being』

四国中央市地域おこし協力隊 経験者 大廣 将也



海の方こう側に憧れて

瀬戸内海沿岸に立ち並ぶ紙工場。日本一の紙のまち『四国中央市』で生まれ育った私は、幼少期から海外への憧れを強く抱いていました。中学生ではじめて海外に行き、その経験が、グローバルに活躍する将来への夢を確かなものになりました。そして地元を離れて大学卒業後、旅行会社の添乗員として働き始めました。

入社からわずか1年が経つ頃に新型コロナウイルスが蔓延し、世界は一変しました。観光協会に転職するも、「自分らしい生き方とは何か?」と、答えの出ない問いに向き合う日々。そして「観光業に関わるのは、これが最後!」そう決意し、7年ぶりに地元での生活が始まりました。

ヒト、モノ、コト、すべてが観光資源でしょ!?

愛媛県の東予エリアは、言わずと知れた

た工業地帯。四国中央市は観光に力が入っていないということは、幼い頃から感じており、半ば諦めてきました。しかし、いざ観光促進をミッションに動き出した時、最も驚かされたのは、知られていない魅力ある資源の原石がそこら中に眠っているということでした。自然景観や産業、神社仏閣、伝統技術といった有形のものだけでなく、この町にいる人たちもまた、素敵な方々ばかりだという発見でした。

自由に楽しく、多様な人材とイベントがしたい

手漉き和紙職人、ファゴット奏者、現役バスケットボール選手、元オリンピック選手、母校の高校生、四国4県の地域おこし協力隊、日本茶インストラクターなどといった面々と、地域資源を活

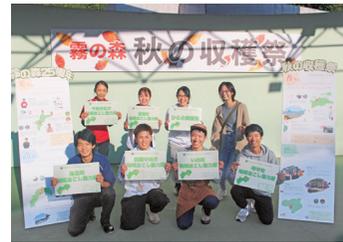


高校生ボランティアとの活動

かしたイベントを企画し、実現してきました。常に「自分自身が楽しむこと」を大切に、大好きな地元で活動する日々は、私にとって大きな幸せでした。

3年間のつながりが大集結 『熊野の杜のマルシェ』

3年間の任期満了を約1週間後に控えた3月末、『熊野の杜のマルシェ』を開催しました。地域の方の想いから始まったこのマルシェを盛り上げようと、これまでの活動で出会った地元の事業者を中心に、食・モノ・体験の出店者が集まりました。



四国の協力隊とマルシェ参加

自分の活動と、協力隊としての人生を彩ってくれた方々と過ごす最後のイベントは、涙なしでは終わりませんでした。

協力隊というキャリアを選ばなかったら、出会うことがなかったであろう人々。コロナ禍がなければ、帰ってこなかったかもしれない地元。この人生の御縁に感謝しながら、



親子で茶摘み体験!



外国人を案内(茶工場)

「これからも故郷で頑張りたい!」という確かな信念が芽生える1日にもなりました。

私が地元定住を決めた理由

協力隊として活動を始めて2年目が終わる頃でさえも、この先何がしたいのか、明確な答えを見つけられないままでした。実は、協力隊応募時の面接では、「任期満了後のことはまだ分かりません。海外で働きたいです」と率直な想いを伝えたことを、今でも鮮明に覚えています。活動中も「昔から何も変わっていないじゃん!」四国中央市が観光に本腰を

入れるはずがない」と、諦めの気持ちが心のどこかにありました。それでも、自分自身が「好き・楽しい」と感じることを妥協せず行動し、このまま信じて継続すれば、地元の観光という道が拓けるといふ、大きな夢が膨らんでいきました。そして、最終的にたどり着いたのが、「地元が好き、これからは残りたいという揺るぎない想いだっただけです。」

満たされた自分の心に気づいた瞬間

その後トントン拍子で就職が決まり、心に余裕をもって残りの時間を過ごした年の瀬のある日、『第8回地域おこし協力隊全国サミット』での講師依頼のオファーをいただきました。

当日は東京に赴き、観光分野をテーマに事例発表をさせていただき、各地の仲間たちと交流しました。交流の中で隊員たちの話題は「行政



全国サミットでの事例発表



バスケット選手の講演とバスケット教室

今後の展望と、自分にとってのWell-being

現在、協力隊として活動した担当地域にある道の駅霧の森で、イベント推進係として働いています。引き続き、地域の素敵なヒト、モノ、コトをつないで、イベントの企画をしていきたいと思っています。また、これまでに培った英語力を駆使し、外国人のお客様に新宮茶の魅力を伝えられています。

「Think Globally, Act Locally」ーこれは、私がはじめて海外に行った『四国中央市中学生海外派遣事業』で教わった、私の人生の軸ともいえる言葉です。このモットーに対する私の解釈は、「世界を見て学べ、そして地元で楽しく活動!」というものです。これからは地元で自分らしく、楽しく生きていくことが、私にとってのまさにWell-beingなのです。

私たち（社）えひめ暮らしネットワークは、『愛媛に暮らす人』『愛媛に移住した人』『愛媛に移住したい人』たちをつなぎ支援し、より元氣な地域が増えていくことを目指すネットワーク組織です。

愛媛県への移住推進、地域おこし協力隊（以下、協力隊）や移住者のフォロー、生業づくりや地域活性化など、愛媛で自分らしく暮らし働く人たちをバックアップすることを目的に設立し、今年度で6年目を迎えます。

「日直えひめ暮らし」として県内の協力隊経験者が日替わりで担当する移住相談及び地域おこし協力隊相談窓口のほか、県や市町からの委託を受けての事業など、多様な場で活動を展開しております。今回は、えひめ暮らしネットワークの参事で元伊予市地域おこし協力隊の高木がこのコーナーを担当します。

地域おこし協力隊のさまざまな定住スタイルを紹介しました

愛媛県では190人を超える協力隊経験者が任期後も定住・定着し、各地で活躍しています。私たちえひめ暮らしネットワークは、そんな協力隊経験者の多様な生き方や働き方を紹介することで、現役隊員へ地域の魅力や可能性を伝える取り組みをしています。

昨年度は、愛媛県移住ポータルサイト「えひめ移住ネット」や、当ネットワークのHPで、県内の協力隊経験者8名の紹介記事を掲載しました。島と街の「ちようどいい暮らし」で縁をつなぐ方、たこ焼き屋さんで町の

インタビュー



定住スタイル えひめ暮らしネットワークインタビュー記事



一般社団法人
えひめ暮らしネットワーク
参事 高木 綾子

人気者になった方、家族で移住し自然な交流が生まれる飲食店を始めた方、複数の仕事でバランスを取る方、特別なスキルがなくても地域を支える等身大の暮らしを送る方など、個性豊かな「定住スタイル」をご紹介します。それぞれ読み応えあるストーリーをぜひご覧ください。

今年度は、協力隊の「現役」と「経験者」の両面から、さらに幅広い事例を紹介予定です。こちらもどうぞお楽しみに！

大洲市地域おこし協力隊導入支援事業を実施しました

えひめ暮らしネットワークでは、市町からのご依頼を受け、地域活性化につながる様々な事業にも取り組んでいます。令和6年度は、大洲市よりご依頼をいただき「地域おこし協力隊導入支援事業」に取り組みました。この事業は、地域、協力隊員、行政の三者にとつてよりよい形で、地域おこし協力隊制度を運用していくための体制づくりをサポートするこ

とを目的としています。

近年、全国的に「協力隊の募集がうまくいかない」「採用してもどのように対応すればいいかわからない」といった課題が挙げられることがあります。そのため、協力隊の基本的な考え方や実際に隊員を募集・受け入れ・活動をサポートしていくための実践的な手法までを学ぶ機会を設けました。

「制度導入・運用の解説」

から始まり、「募集要項の作成ワークショップ」「掲載した募集情報をもとに応募者視点での改善」「応募方法に関するフォローアップ」など実践的なワークショップを実施しました。

愛媛県の中間支援組織として今年度も、移住、地域おこし協力隊制度、地域づくりといった分野の事業に横断的に取



作成した募集要項一つ一つを解説



職員向け理解促進セミナーの様子

今年度もやります！「ゆるいランチ会」と「三三×えひめ暮らしネットワークランチ交流会」

り組みながら貢献していきたいと考えています。

えひめ暮らしネット

ワークが運営するコワーキングスペース南予サインは5周年を迎え、4月18日に南予エリアに移住された方や協力隊の皆さんを歓迎するランチ会&懇親会を開催しました！総勢42名が参加し交流を深めました。



5月28日に行われたtilikiランチ会



4月18日に行われた南予サインランチ会

会員募集中！

一般社団法人えひめ暮らしネットワークでは、会員を募集しています。また、コワーキングスペース南予サイン『COWORKING-HUB nanyo sign』では、コワーキング会員の募集をしています。南予サインはドロップイン（1日限りの利用）も可能ですので、お気軽にお問い合わせください。



会員登録はこちらからどうぞ！



COWORKING-HUB nanyo sign について



人間牧場主・年輪塾々長 若松 進一

「私のウエルビーイング」

私はこれまでウエルビーイングの源となると思える自分づくりに、多くの人とかわつて生きて来ました。今を起点に考えれば過ぎ越し年齢は過去年齢であり、迎えるであろう、これから紡ぐ年月は未来年齢です。思い出に残る80年間の過去年齢を、多文化共生社会と地域づくりを目指して過ごしてきましたが、幸運にもささやかながらウエルビーイングに近づいたような気がしています。そして仮に100歳まで生きるとするこれから20年の未来年齢もまた、これまでと同じようにウエルビーイングを目指したいと思っています。人間は生まれると家族の一員として育ち育てられ学校や社会へと交遊関係が広がり、歩いて行ける距離から乗り物に乗って移動する距離へ、学業を終えると職業を選んで自立し、結婚しやがて子どもが産まれます。その間どれ程の人と出逢いどれ程の多文化を取り込んで生きてきたことでしょうか。私の場合大き

はほたる保護活動で有名な日本の現役校舎では最も古い翠小学校など、オーバーツーリズム気味の名所が沢山出揃つてあるようです。観光客ゼロから出発し何もないと嘆いていた双海町ですが、今では小さいながら県内屈指の観光地となりました。最近中学生や高校生たちで作るジュニアリーダー会が、海岸国道378号線沿い1km毎に手作り設置した夢のベンチを作っていて、間もなくSNSなどで登場する予定です。

③ ボランティアコミュニティ

私は若い頃青年団活動をしていました。26歳で愛媛県青年団連合会の会長を最後に退団しましたが、青年団経験者は何かと忙しく退団後何もしないことに気づき、20人の仲間とともに水平思考から垂直思考の変化を求め、空からふるさつを見る運動を思いつきました。その報告会を煙会所で持った折、囲炉裏の煙が目染みて涙が出ることを初めて知った子どもがいて、そのことをきっかけに無人島に挑む少年のつどいを思いつき、ひょうたん型由利島共和国と名付けた中島町の無人島由利島で50人の無人島キャンプを行いました。台風が来て二神島へ避難したり、カヤ1500束を運

く分けると家族コミュニティ、地域づくりコミュニティ、ボランティアコミュニティ、人間牧場コミュニティ、デジタル・アナログコミュニティと5つのコミュニティを中心として他人とともに、他人の恩恵を受けながら生きて来ました。

① 家族コミュニティ

わが家は最近まで大正生まれの祖父を含めた7人の大家族が二つ屋根の下で暮らしていました。昔の日本は殆どどの家も大家族で、良き日本の伝統文化を受け継いできました。が、いつの間にか少子化による核家族が進み、職住分離や生活も洋風化して生活文化の伝承が難しくなっています。私は消えつつある日本文化を守ろうと家の横に囲炉裏を切った4畳半の私設公民館煙会所を作り、様々な人と家族ぐるみの交流をしています。家は家族のためにあるのですが、私たち夫婦、息子夫婦と子ども2人にはそれぞれ知人・友人がいてそれぞれに煙会所を利用して交遊を広げています。何年前か前、新型コロナの影響で学校が2ヶ月半も休みになった時、孫たちの発想で敷地内に新たにミニ・ツリーハウスを作るプロジェクト、空中スイカを作るプロジェクト、

び無人島に直径10mの竪穴式住居を作つて語り部のつどいを開いたり、長さ10m直径1m70cmのアラスカ産モミの木をくり抜いて丸木舟を建造し瀬戸内海を航海した青年の頃が、私は一番輝いていた時代でした。

④ 人間牧場コミュニティ

私は退職後、瀬戸内海を見下ろす標高130mの高台に人間牧場を自費で造りました。中心施設水平線の家には板間26畳とウッドデッキ26畳合わせて52畳の広さです。ここでは現在まで子どもを対象にしたふるさと教育のための子ども体験塾と自己実現のための年輪塾を開いています。かつて10年で40回を目指し廃屋を借りて開催したボランティア塾(青春塾・朱夏塾・白秋塾・玄冬塾)で、40回目は永六輔さんを招くなど大いに学びました。その流れを汲んだ年輪塾は、宮本常一・中江藤樹・二宮金次郎・ジョン万次郎に焦点を当て、それぞれ2年間をかけて学びました。今では中国の古書大学の素読と、居処を造つて志を育む書志検定に合格した有志が10人以上育っています。今取り組んでいるのは宮城県気仙沼の畠山重篤さんが提唱した「森は海の恋人」に呼応して、荒れた土地にクヌギの森をつ

ハンモックを作るプロジェクト、イカダを作り無人島を探検するプロジェクトなどを立ち上げて大いに楽しみました。息子はカブトムシを育て200箱を無償配布したり、蜜蜂を飼って蜂蜜の自給を始めました。また朝顔を育てて道の駅で朝顔を開くなど活動の輪を広げています。勿論私も約1反の家庭菜園で無農薬野菜を作り、近所に配って喜ばれています。海の資料館海舟館も親父の造つた和船模型、それに昔の漁村の生産や暮らしを展示していて、家庭は多文化共生社会の原点だと思っております。

② 地域づくりコミュニティ

今地域では高齢化や過疎化、加えて地域に住んでいても隣組の活動さえ拒否したり、したくでもできない状態になりつつありますが、私たちの町には自治公民館活動が盛んで、館費を出し合いながら自助・公助・共助の精神で続けています。その最たるものは夕日によるまちづくりです。JR下灘駅のプラットホームで始めた夕焼けコンサートがきっかけで夕日によるまちづくりが始まり、住民による閩住(うるすみ)の菜の花畑や下灘の水仙畑、年間55万人の集客を誇る夕日のメッカふたみシーサイド公園、さらに

くる運動です。港の見える丘にドングリから育てた苗木を植え、「徳の木を植える」活動を子どもたちと一緒に楽しみながらやっています。人間牧場は目出度く昨年20周年を迎えました。

⑤ アナログとデジタルコミュニティ

アナログコミュニティは毎日ハガキを書き投函すること、デジタルコミュニティは毎日Facebookとブログに記事を書き情報発信することなどを行っています。毎日ハガキ3枚は365枚×3枚×85円＝93075円になり私自身への投資です。以上、私は他の人を巻き込みながらウエルビーイングな社会を目指して頑張っています。

「家族から ウエルビーイング 始めよう やればできるさ 楽しいことを」
「あれこれと 失敗成功繰り返す 10年経つと物語になる」
「死ぬ時に いい人生だったと 言えるよう今からだって 遅くあるまい」
「欲もなく 他人から見れば 他愛ない 私はそれで 丁度いいです」
(若松進一の笑売談阿)

今年、戦後80年の節目の年。思えば、終戦時に10歳だった少年が今は90歳、それと果たして少年にとってはどの程度の世相感だったのか。何れにしても、義務教育を始めたとして学校できちんと戦争を学んだ記憶にも乏しいこれまでの戦後経過を考えると、果たしてどうなのか、故郷の情報資料から戦後80年に想いを馳せてみよう。

宇和島飛行場跡

宇和盆地にはかつて飛行場があった。今となつては殆ど知られていないが、地元で永長飛行場と呼ばれていたそれは、池田宏信著「昭和二〇年八月、愛媛の本土決戦準備始末」によれば、正式には陸軍の「と号



土採り場跡の崖

と、今となつては飛行場遺構としての現況は何も残っていないが、建設時の土採り場であった崖地が宇和川沿いの山肌認められるのみ。その土砂を現地に運ぶために渡したトロッコの橋(現存せず)は、しばらく「兵隊橋」と呼ばれていた。

なお、県内にはこうした特攻用の急造飛行場が他にも6か所造られていた。東予方面では、周桑郡に2か所(野飛行場(海軍)と壬生川飛行場(陸軍))。中予では温泉郡に3か所、竹ノ下飛行場(海軍)と松山東(北吉井)と松山西(久米)の陸軍と号飛行場。南予は菅田飛行場(海軍)。

防空壕

若い人でも防空壕の用語くらいは聞いているだろうが、これも今となつては意外に現

専用秘匿飛行場」として昭和20年の春に急造された。規模は、幅60m長さ1200m。この「と号」という聞き慣れない用語は、特攻機の略称。つまりは「億総特攻」のスローガンの元、本土決戦に向けて着々とその準備が進められていたことになり、身近な所にも事態は切迫していたことが分かる。

この貴重な空撮写真は、当時の日本に進駐していたGHQにより、昭和23年3月30日に撮影されたもの。左下の左右に延びるうすすらとした線が、その飛行場跡で次第に田畑に戻りつつあることが分かる。当然のことながら全国にあつた軍関係施設は、戦後当局指示により破却命令が出ていた訳で、これは恐らくその指示が実行されているか確認の撮影だったかと思われる。勿論のこ



1948.3.30 GHQ撮影

物が残っていないかったり、見たことの無い若い世代も多いに違いない。全国で防空壕の悉皆調査などはされて来なかったため、その意味では四国で最初に造られた八幡浜第一防空壕(昭和16年2月竣工)などはもって知られて良い遺構だが、筆者の居住域(西予市宇和町)の近くでも聞けばその現存事例がいくつかある。写真は、山田地区にある坂本家防空壕とその右隣に近接する土居家の防空壕。数年前に坂本隆重氏に聞き取りをした際は、子供の頃にトロッコに土を入れ竹2本をレール代わりに穴の外に出す作業の手伝いをしたことを懐かしく語られた。また、前述の飛行場に不時着機が降りた時に偶然その飛行音を聞いたので走って見に行つたとも。帰りに丁度ラジオの玉音放送をやつていたので、あれは昭和20年8月15日だったと。当時石城国民学校の3年生だったと貴重な証言も聞かせて頂いた。その坂本氏も昨年末に物故され、語り部の激減する今を自覚させられる。



土居家防空壕 坂本家防空壕と証言者の故隆重氏



慰問袋に入れて戦地に送った写真

慰問写真

我が家のアルバムから貴重な1枚。この集合写真は昭和18年秋祭りの際に、戦争が激しさを増す中で、戦地にいる故郷出身の兵士に、肉親の近況を伝える為、慰問袋に入れて送ったものらしい。果たしてその中の何人が生きて帰り、何人が帰らなかったのか、様々に想いが及ぶ。

令和6年度 地域づくり活動 アシスト事業報告

ミライの関川を安心安全にするために

ミライの関川に地域住民として何を求めるのか

令和3年7月に関川公民館が主催した「少子高齢化」「関川地域の課題」について考えるワークショップから発足した「みらいの関川を考える会」は、今年で3年目。「学生SBPコンテスト」を通して、子どもたちが感じている地域への思いを知り、「買い物支援事業」でスーパの移動販売誘致に際し地元ならではの提案を行い、「パートナーシップ充実事業」で婚活支援、「光のミュージアム・ゼロエネルギー推進事業」でイルミネーションを児童・保護者と協力して設置、「関川資源保護事業」では河川敷の除草作業や県土木事務所との意見交換、「空き家対策貢献事業」として地域の空き家の実態を可能な範囲で調査するなど、地域住民が参画する機会を増やしつつ、様々な方面の活動を展開しています。

関川フェス2024の開催

「子どもと共に考える防災」をテーマに災害時に何が必要なのかを考え、地域住民の防災意識向上を目指し、「関川フェス2024」を開催しました。防災・健全育

成標語コンテストや防災飯試食会、竹飯実演、新聞スリッパ作成、段ボールベッドや防災バッグの展示等のほか、書deアート、関川クイズ等、子どもから大人まで楽しめる企画を実施しました。段ボールベッドから周辺にガラスの散っている場所で非常持ち出し袋を持って部屋の外に出るまでのシミュレーションを体験し、その場にいる人との意見交換をすることで、自分では気づいていなかった点に気づくなど、いざという時の行動へとつながりました。イベント実施前には松山城の土砂災害、実施後にも宮崎・神奈川と大きな地震が起き、初めて「南海トラフ巨大地震注意」が発表されたことで、より一層、防災への



防災飯のカレー美味!



竹飯のいい香り♪

関心も高まっており、今回の企画は地域住民が災害や健全育成に対して主体的に考えるきっかけづくり、また自己研鑽を高めるための素晴らしい取り組みとなりました。



家からどの道を通って逃げようか?

みらいの関川を考える会
代表 近藤 和明



ミライは今に続いている

危機感をもつ関川だから…今だからできる! 社会を安心安全に構築していくのは地域力の結集あるのみ! 自場力の重要性が望まれていると感じております。ミライを作るのは、一人ひとりの生きる活力です。関川地域の活力をミライへつなぐのは今の私たち! 「持続可能な「活力ある」「住みよい」をテーマに関川地域が自立できる仕組みづくりを考える会を展開していきます。

令和6年度 地域づくり活動 アシスト事業報告

小学校にチャレンジエリアを造ろう!! 「ビオトープ復活大作戦」

玉津地区の紹介

西条市玉津地区は、西条市の東に位置し西条市立玉津小学校を校区とする4147世帯8501人(令和7年3月末現在)の地区です。平成の大合併以降地域の人口は、増加傾向にあります。

ただし、地域コミュニティの核となる自治会の加入率は平成17年度71.99%であったものが、令和4年度には、50.56%と大幅に減少し、令和6年度以降は50%を下回る状況にあります。

人口の増加に対し、自治会加入率は年々減少して、地域コミュニティの希薄化が懸念される地区と言えます。

「ビオトープ復活大作戦」の目的

玉津小学校の「古池」はこの地域独特のうちぬき自然噴出水の場所、常に新鮮な水が湧き出ています。ただ、現状は、手つかずの状態(池底に汚泥等が溜まる)で魚が十分に棲めない状況となり、その「長所」が全く生かされていません。今回はその特徴を生かすために池全体を「ビオトープ化」し、児



施工前

童にとつて身近な環境を再設計することで、自らも楽しもうとする活動です。

また、改修後における「古池」周辺には、児童の自然・環境への関心を深め、生き物の観察及び飼育を通して自然保護に関する意識を高めると共に、池周辺での野外活動を楽しめる「チャレンジエリア」をつくり、自然体験ができる場所として活用していきたいと考えています。

令和6年度の取り組み

今回の「古池改修事業」への参加を玉津小学校PTAに依頼し、数十名の親子と共に今回の事業を開始することとなりました。作業日は2週間に1回程度(週末午前中)と決め、古池の汚泥除去や古池周りの除草活動を実施しました。参加児童も普段



作業風景



完成



ビオトープ完成記念式

あまり経験しない作業に興味津々で各回とも大活躍でした。作業最終日は、玉津公民館で環境マイスターの光澤安衣子氏による「水辺の生き物の生息について」のワークショップを行い、今年度事業は終了となりました。

この事業で見込まれる地域の活性化

- ① 活動的、意欲的な子どもを育てるために子どもたちの考えや視点に沿った活動を実現させる。
- ② 大人サポーターは子どもたちの活動を支援しながら、子ども「夢実現」に向け共に活動する。

来年度以降の取り組み・事業計画

玉津小学校では、令和3年度に玉津小学校運営協議会(コミュニティ・スクール)事業が開始され「地域とともにある学校づくり」を目指しております。今後の事業計画は、コミュニティ・スクールの地域・学校協働活動の「体験学習」の一環として管理していく予定としております。



ワークショップ風景

ひまわりアート実行委員会
会長 奥田 育実

「えひめ移住応援隊」協力事業者募集中



えひめ移住応援隊とは？

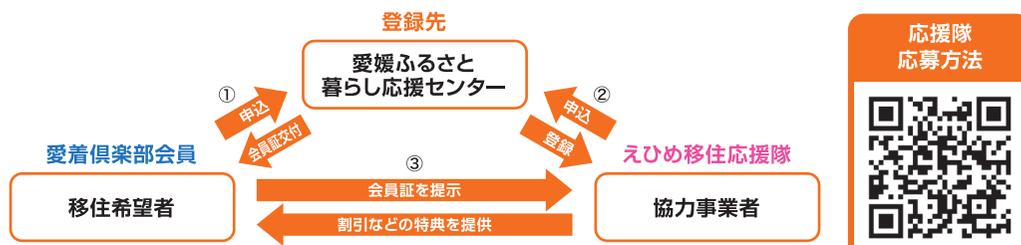
『えひめ愛着倶楽部』に入会していただいた会員に対して、会員証の提示により、各種割引、サービスや移住時の情報提供・相談などの特典を提供していただける企業・店舗・施設・先輩移住者等です。令和7年6月1日現在、88社の事業者様にご協力いただいています。

えひめ愛着倶楽部会員とは？

愛媛県に興味のある県外居住者で、将来的に愛媛県への移住を考えている方のうち、下記条件のいずれかに該当する方

- ▶愛媛県が指定する移住関連イベント(オンライン含む)に参加された方
 - ▶南予子育て移住メールマガジンへの登録及び所定のアンケートに回答された方
 - ▶県及び市町の移住相談窓口で対面相談をされた方
- 令和7年6月1日現在、416名の移住希望者の方にご登録いただいています。

制度概要



- ①会員要件を満たした移住希望者が「愛着倶楽部会員」に登録する。
- ②特典サービス等の提供を協力いただける事業者が「えひめ移住応援隊」に登録する。
- ③「えひめ移住応援隊」(協力事業者)が「愛着倶楽部会員」(移住希望者)に特典・サービスを提供する。東京及び大阪で開催する「えひめまるごと移住フェス」や、えひめ地域活力創造センターの「Instagram」等で、応援隊の紹介や愛着倶楽部会員の登録案内を行います。

応援隊
応募方法

制度の詳細・応募方法は上記QRコードでご確認ください。

特典概要

移住希望者が移住の体験や準備をする際に、次の特典例のような料金の割引やサービスの提供、移住相談に協力していただける事業者(先輩移住者含む)を募集しています。

移住体験	レンタカー代、公共交通運賃、宿泊料金、飲食代の割引きなど
移住準備	引っ越し費用・家電製品の購入費用・運転免許等の取得等費用・賃貸物件手数料の割引き 住宅リフォーム見積無料など
ほかにも...	口座開設時に記念品プレゼント、車検時工賃割引・オイル交換無料、コワーキングスペース利用料金の割引など

愛媛ふるさと暮らし応援センター Tel / 089-926-2200 Mail / info@e-iju.net
〒790-0065 愛媛県松山市宮西1丁目5番19号 (公財) えひめ地域活力創造センター内



愛媛県
イメージアップキャラクター
「みっちゃん」

令和6年度移住交流促進事業 「えひめまるごと移住フェス」実施報告

当センターでは、県内20市町が参加する愛媛県最大の移住イベントとして「えひめまるごと移住フェス」を運営しています。本イベントでは各市町による個別相談を軸に、移住希望者受入れに積極的な就職・就農等支援団体の出展や、地域おこし協力隊の募集説明会などを実施しています。ここに、令和6年度の実績をご報告します。



実施内容について

実施日時	会場	参加者数等
第1回(東京) 令和6年7月27日(土) 10時00分～16時00分	東京交通会館12階カトリアサロンA (東京都千代田区有楽町2-10-1)	146組、185人 相談件数等/376件、462人
第2回(大阪) 令和6年12月14日(土) 10時00分～16時00分	ナレッジキャピタル コングレコンベンションセンター ルーム1～3 (大阪府大阪市北区大深町3-1 グランフロント大阪北館地下2階)	115組、155人 相談件数等/331件、418人
第3回(東京) 令和7年2月2日(土) 10時00分～16時00分	東京交通会館12階カトリアサロンA (東京都千代田区有楽町2-10-1)	153組、229人 相談件数等/421件、633人
第4回(大阪) 令和7年3月1日(土) 10時00分～16時00分	AP大阪茶屋町 (大阪府大阪市北区茶屋町1-27 ABC-MART梅田ビル8階)	82組、119人 相談件数等/239件、327人

イベントは上記日程で実施いたしました。また、イベント内コンテンツとしては、愛媛県概要説明、移住者による講演、地域おこし協力隊の募集説明・トークセッションを実施し、多くの方に移住に関する相談の機会をご提供することができました。

特に移住者講演や個別相談が好評で、参加者からは「実際に移住した人の話が聞けて参考になった」「インターネットではわからない、現地で暮らす人のリアルな話が聞けてよかった」といった声を多数いただきました。また、事後アンケートでは回答者の約9割の方から「満足」「やや満足」との評価をいただきました。

令和7年度も引き続き、よりよい運営に努めてまいります。

令和6年度 愛媛県移住実績について

令和5年度までは、愛媛県の移住者数は右肩上がり増加しましたが、令和6年度の移住者数は6,910人、世帯数は5,100世帯、相談件数は7,432件となり、いずれも令和5年度の実績を下回る結果となりました。これらの減少の背景には、主に「新型コロナウイルス感染症の収束により、再び都市部への帰帰傾向が見られるようになったこと」、「移住施策に積極的に取り組む自治体が全国的に増加し、地域間競争が進んでいること」が要因として考えられます。

今後の移住支援事業について

愛媛県を選んでくれた方々、関わってくださった方々、そして地域住民のみなさんが、地域で幸せに暮らしていける社会の実現が何よりも重要であると考えています。数字を意識しつつも、引き続き愛媛での暮らしが「幸せ」と感じられる方々との接点の一つでも多く創出できるよう、愛媛らしさを大切にしながら、時代に合った移住フェアの運営に努めてまいります。

賛助会員大募集!!

当センターは、センターの趣旨や事業に賛同し、活動にご支援をいただくとともに、諸活動を通じて、地域活性化を支える方々のネットワークとなる企業、NPO法人、地域づくり団体、また地域づくりに関心がある皆様を対象に、賛助会員制度を設けています。

年会費

- 法人会員(特定非営利活動法人を除く) [一口] 30,000円/年
 - 個人及び団体(特定非営利活動法人を含む) [一口] 3,000円/年
- 複数口でのお申込みもいただけます。

主な会員特典

- 地域づくり情報誌「舞たうん」のお届け(年3回)
- 地域づくり活動に関する助成事業の案内
 - 地域づくり活動アシスト事業 など
- センター主催・実施事業の案内
 - 地域活力創造フォーラム ○「地域づくり力」講座 ○移住者交流会 など

ご入会の手続き

ご入会のお申込みは、随時受け付けております。

次のURL又はQRコードから、専用フォームにてお申込み。

<https://forms.gle/NWHJoyoUBvnaMzvP8>



お問い合わせ・お申込み

公益財団法人 えひめ地域活力創造センター

〒790-0065 松山市宮西1丁目5-19 (愛媛県商工会連合会館3階)

電話:089-926-2200 FAX:089-926-2205 E-mail:ehime-chiiki@ecpr.or.jp

【編集後記】

「内」と「外」といった立場の違いだけでなく、同じ立場の中にも、年齢や性別など多様な違いが存在しています。自分と違う要素を持つ誰か、と好循環を生み出す社会を実現するために、関係者同士の相互理解と歩み寄りが不可欠ですが、ではどうすればよいのか。そのヒントを先達の皆さまに教えていただく！そんな思いから、本号の企画を立てました。

「問題提起が多くされるテーマではあるものの、言語化するのが難しいテーマにしてしまったなあ」と、正直なところ不安もありましたが、執筆者の皆さまから素晴らしい原稿をお寄せいただくことができ、本当にありがたく感じています。そういったことも考えるといいのか、という角度の閃きが読者の皆様に届く、といいなと願っております。

短い準備期間とご多忙の中、ご協力くださった執筆者の皆さま、そして本企画にお力添えいただいたすべての皆さまに、心より御礼申し上げます。

(川村 明香)

本誌へのご意見や地域づくり活動のトピックスなどがありましたら、お気軽に当センターまでお寄せください。

〒790-0065

松山市宮西1丁目五番十九号

愛媛県商工会連合会館3階

(公財)えひめ地域活力創造センター

TEL 089(926)2200

FAX 089(926)2205

発行/令和7年7月

(公財)えひめ地域活力

創造センター

(公財)愛媛県市町振興協会
印刷/平和印刷工業株式会社